

### 3. 4 統括委員会によるサブプロジェクト全体の運営

#### (1) 業務の内容

##### (a) 業務の目的

サブプロジェクト①に、3つのサブプロジェクトのメンバーからなるプロジェクト全体を統括運営する統括委員会事務局を設け、サブプロジェクト相互の協力・連携を図り、研究成果の社会還元への推進に努める。研究の中間成果も含めて、広く研究の成果を社会に説明すること等を通じて、社会の科学リテラシーや防災リテラシーの向上に繋がる方策を検討して、実践する。さらに、本研究計画で主として対象とする首都圏での成果を、中京圏、京阪神圏等、脆弱性を克服すべき多くの都市にも広げる方策についても検討する。

##### (b) 平成 26 年度業務目的

- 1) サブプロジェクト相互の協力・連携を図るため、3つのサブプロジェクトの研究者等からなるプロジェクト全体を統括運営する「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会」を2回程度開催して、プロジェクト全体の進捗を管理するとともに、サブプロジェクトの研究の進展に対する相互理解を深め、サブプロジェクト間の協力・連携による発展的研究成果の創出に努めるとともに、研究成果の社会還元を推進する。
- 2) 都市の地震被害評価や巨大な地震が都市を襲うことを想定した激甚災害の軽減方策についての研究を推進するため、各サブプロジェクトが開催する国内外の交流会等に参加し、地震防災研究に関する議論や交流を図る。
- 3) 平成 26 年度までの都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト全体の成果を活用促進するために、多くの人々に向けた中間成果報告会の開催や広報物を作成し、ホームページへの掲載や希望者への配布を行う。

##### (c) 担当者

所属機関	役職	氏名	メールアドレス
東京大学地震研究所	教授	平田 直	

#### (2) 平成 26 年度の成果

##### (a) 業務の要約

- 1) サブプロジェクト相互の協力・連携を図るため、3つのサブプロジェクトの研究者等からなるプロジェクト全体を統括運営する「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会」を2回開催して、プロジェクト全体の進捗を管理するとともに、サブプロジェクトの研究の進展に対する相互理解を深め、サブプロジェクト間の協力・連携による発展的研究成果の創出に努めるとともに、研究成果の社会還元を推進した。
- 2) 都市の地震被害評価や巨大な地震が都市を襲うことを想定した激甚災害の軽減方策についての研究を推進するため、各サブプロジェクトが開催する国内外の交流会等に参加し、地震防災研究に関する議論や交流を図った。

3) 平成 26 年度までの都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト全体の成果を活用促進するために、多くの人々に向けた中間成果報告会の開催や広報物を作成し、ホームページへの掲載や希望者への配布を行った。

## (b) 業務の成果

### 1) 都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会

平成 26 年 9 月 2 日と平成 27 年 1 月 22 日に「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会」を開催した。各サブプロジェクトの研究代表者と担当者及び有識者から構成される統括委員会委員とオブザーバが出席し、サブプロジェクトごとに進捗状況について説明があった。これらの説明をもとに、他サブプロジェクトの研究の進展に対する相互理解を深め、サブプロジェクト間の連携や中間成果の広報活動などプロジェクト全体の運営について意見交換や総合的な議論を行い、プロジェクトを円滑に推進させた。

なお、運営委員会の議事録は、4.1 会議録に掲載した。

### 2) 国内外の交流会等への参加

地震防災研究に関する国際的な交流を図るため、平成 26 年 10 月 22 日に開催された「国際危機管理学会」に参加し、最新の地震防災研究に関する研究成果の発表と議論を行った。プログラムを表 1 (P.196) に示す。

### 3) 中間成果報告会の開催

本プロジェクトでこれまでに得られた成果を一般の方々に紹介し、今後の研究にいかすための様々な要望や意見をいただくことを目的とした中間成果報告会を平成 26 年 5 月 14 日に東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにて開催した。参加者は 380 名であった。報告会は 2 部構成で行った。第一部では、平田直（東京大学地震研究所）、中島正愛（京都大学防災研究所）、林春男（京都大学防災研究所）の 3 氏から理学、工学、人文社会科学の立場から研究成果の報告があった。第二部では、第一部の報告を踏まえたパネルディスカッションを行った。中間成果報告会のプログラムを表 2 (P.197) に、会場風景を図 1 (P.197) に示す。

## (c) 結論ならびに今後の課題

「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会」を 2 回開催した。各サブプロジェクトが開催した国内外の交流会に参加し、最新の地震防災研究について活発な議論を行った。また、中間成果報告会を開催し、プロジェクト全体の成果を活用促進した。

## (d) 引用文献

なし

(e) 学会等発表実績

学会等における口頭・ポスター発表

発表成果（発表題目、口頭・ポスター発表の別）	発表者氏名	発表場所（学会等名）	発表時期	国際・国内の別
Regional Characterization of Seismic Hazard in Tokyo Metropolitan area using a highly-dense seismic network (MeSO-net)(口頭)	Naoshi Hirata	国際危機管理学会（新潟市）	2014年10月22日	国際
Super Computer Simulation for Earthquake Disaster Mitigation and Reduction - Towards Tokyo Metropolis Simulation Using MeSO-net -（口頭）	Muneo Hori	国際危機管理学会（新潟市）	2014年10月22日	国際

学会誌・雑誌等における論文掲載

なし

マスコミ等における報道・掲載

なし

(f) 特許出願，ソフトウェア開発，仕様・標準等の策定

1) 特許出願

なし

2) ソフトウェア開発

なし

3) 仕様・標準等の策定

なし

(3) 平成 27 年度業務計画案

- 1) サブプロジェクト相互の協力・連携を図るため、3つのサブプロジェクトの研究者等からなるプロジェクト全体を統括運営する「都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト統括委員会」を2回程度開催して、プロジェクト全体の進捗を管理するとともに、サブプロジェクトの研究の進展に対する相互理解を深め、サブプロジェクト間の協力・連携による発展的研究成果の創出に努めるとともに、研究成果の社会還元を推進する。
- 2) 都市の地震被害評価や巨大な地震が都市を襲うことを想定した激甚災害の軽減方策に

ついでの研究を推進するため、各サブプロジェクトが開催する交流会等に参加し、地震防災研究に関する議論や交流を図る。

表 1 国際危機管理学会 プログラム

The International Emergency Management Society Japan Chapter

国際危機管理学会日本支部

国際危機管理学会 TIEMS 2014・IN・NIIGATA

Special Session Collaborated with MEXT Special Project on ert トが開催する交流会等に参加し、地震防災研究に関する議論や交流を図る。成果の社会還元を推進する。ation

October 22th, 2014, 14:00-16:30

●Earthquake hazard and disaster characterization (14:00-14:50)

Naoshi Hirata (Earthquake Research Institute, The University of Tokyo), Regional Characterization of Seismic Hazard in Tokyo Metropolitan area using a highly-dense seismic network (MeSO-net)

Muneo Hori (Earthquake Research Institute, The University of Tokyo), Utilization of Super Computer Simulation for Earthquake Disaster Mitigation and Reduction - Towards Tokyo Metropolis Simulation Using MeSO-net -

●Maintenance and Recovery of Functionality in Urban Infrastructures (14:50-15:40)

Yoshitaka Suzuki (Structural Research Department, Kobori Research Complex inc.), Behavior by Shaking Table Test for Quantification of Collapse Margin of Steel High-Rise Buildings

Michihito Shiraishi (Institute of Technology, Shimizu Corporation), Structural Health Monitoring for Early Recovery of Building Functionality and Serviceability after Earthquakes - System verification in large shaking table test of steel high-rise building -

●Urban Resilience (15:40-16:30)

Russ Johnson, Director, Public Safety and Homeland/National Security, ESRI: ArcGIS Platform deployment for the New Madrid Earthquake drill and Napa Earthquake

Ljubica Mamula-Seadon, Senior Research Fellow and Co-director, Centre for Disaster Resilience, Recovery and Reconstruction, Faculty of Engineering, The University of Auckland: Christchurch earthquakes: Governance transformation during response and recovery

表2 中間成果報告会 プログラム

あいさつ

磯谷桂介（文部科学省大臣官房審議官）

清水乙彦（文部科学省研究開発局地震・防災研究課防災科学技術推進室長補佐）

第一部 講演

サブプロ①「東日本大震災後の首都圏の大地震とその災害像」（平田）

サブプロ②「鉄骨構造建物の崩壊余裕度と損傷判定に関わる大型振動台実験」（中島）

サブプロ③「大規模災害の発生を前提とした災害からの回復力の向上」（林）

第二部 パネルディスカッション

司会：前川宏一（東京大学工学系研究科教授）

パネリスト：伊藤哲朗（東京大学生産技術研究所客員教授、元内閣府危機管理監）

小室広佐子（東京国際大学副学長、元テレビキャスター）

本田茂樹（株式会社インターリスク総研特別研究員）

平田直（東京大学地震研究所教授）

中島正愛（京都大学防災研究所教授）

林春男（京都大学防災研究所教授）



図1 中間成果報告会の会場風景